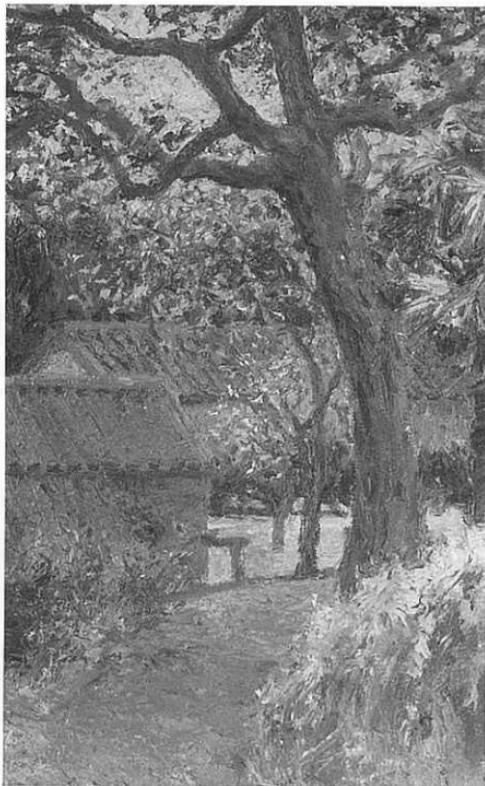


佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.80



題名風景

材質油彩・キャンバス

大きさ
五三・三×三三・五
cm制作年
大正八年（一九一九）作者
岡田三郎助

岡田三郎助（明治二年～昭和十四年）五〇歳のときの作品。この年岡田は帝国美術院会員に任じられ、名実ともに画界の頂点にあった。

当資料は、一般に知られている岡田の隱やかな風景画と異なり、絵具の使い方、筆使いが極めてねちっこく、いわば油絵具の良質の面を強調する作品となつていて、画題は、当時流行した「何の変哲もない」風景の一隅を描いている。

目 次	○岡田三郎助「風景」 表紙
	○昭和62年度新収蔵品展の資料紹介 2～3頁
	○歴史講演会要旨「弥生人のマツリと暮らし」 4～5頁
	○肥前国府政序復元の試み 6～7頁
	○お知らせ 8頁

昭和62年度 新 収 藏 品 展

昭和62年度に新たに収蔵（購入・寄贈）された資料を県民の皆さんに紹介する
「新収蔵品展」を開催します。これに当って、主な資料について紙上紹介をします。



ハイタカ ワシタカ科一

Accipiter nisus Linnaeus

嘴峰13mm、翼長255mm、尾長198mm、跗蹠61mm

ハイタカはハト位の大きさのタカで、体の上面は暗青灰色で、下面は白っぽく、暗褐色の細い横縞がある。白い眉斑と尾に4本の暗色帶をもつのが特徴である。

北海道、本州で繁殖の記録がある。佐賀県では秋から冬にかけて平地や丘陵地のアカマツ林、雜木林に渡ってくる。林内に住み、農耕地や草地などでツグミ位までの小鳥やネズミなどを捕える。飛行は3、4回羽ばたいて滑空をし、空中や地上の獲物を背後から襲う。

木造聖観音・木造勢至菩薩立像 2軀

両像は桧材の寄木造りで玉眼とし、表面は黒漆地に金箔を貼っている。像高は聖観音が87.2cm、勢至菩薩が86.5cm。頭部は正中線で左右の材を寄せ、これを同じく正中線で左右に別材を寄せた体部材に挿入している。また、髪や両肩先・両足首および、勢至菩薩像の両手首先などを別に寄せている。

面部は下膨れの傾向が見受けられる。面相表現は抑揚を抑えた柔和なものとしている。また、肩は撫肩で胸部・腹部とも幅より厚みを重視したものだが、自然な感じは



木造聖観音立像



木造勢至菩薩立像

無くしていない。これに比べ下半身は特に奥行きが厚く、側面感には重たさを感じさせる。しかし、両肩の襦袢や胸部の条帛、下半身にまとわれた裳裙の表現は見事で、薄手のものに軽やかな襞を刻んでいる。

両像は鎌倉時代末期から遅くとも、南北朝時代の制作と考えられる。

当世具足（松田家甲冑）

小城鍋島家創出当時から小城藩に仕えた松田家伝世の甲冑で堅実な家風を伝える。質朴で地味な作造である。なお、右胸の標識は佐賀藩の軍の標識の中に四角な黒の団をして、小城藩の備（本藩は15組、その他の支藩などは備という）の標識で幕末期のものである。

四季の花図（1幅）

作 者 柴田是真筆

制 作 江戸時代末期～明治時代初頭

品質・形状 紬本着色 縦122.6×横54.3cm



四季の花図



当世具足

型絵染着物 芋葉文

作 者 鈴田照次(佐賀県) 制 作 昭和31年(1956)
 品質・形状 絹紬地着物 法 量 着丈153.0cm
 鍋島更紗の復元で名を成す鈴田の第2期作品。型絵染の中でも初の着物の形で作品を発表した記念すべき第10回新匠会出品作である。

次第に流麗な図案に移行していく型絵染の意匠に比べ、力強く素朴な図案である。白抜きが深まりゆく秋の月を映して野辺の芋葉・雑草の色付きが、枯草の息吹きを感じられる。作者の初期に於ける労作で、意欲的な好作品である。

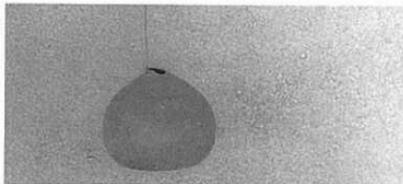


型絵染着物 芋葉文

古い壺の枯草

作 者 島内 きみ 材 質 油彩・キャンバス
 大きさ 60.5×91.0cm 制 作 昭和61年(1986)
 島内きみ(大正5年(1916)・佐賀市生まれ)後、佐世保市に転居。長崎女子師範学校を卒業。昭和13年文展初入選。昭和15年国展(国画会展)初入選。以来国展に出品。現在国画会会員。

「古い壺の枯草」は画風の変遷を知り得る最新作である。県内の数少ない女流画家の一人。



古い壺の枯草

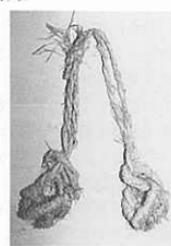
胴引き用具

ソリ：丸太をこの上に積んで牛に引かせて搬出する。

カン：大木を搬出する時に使用する。これを木口に打ち込んでロープを掛けて引きずっていく。長さ31cm。

カン打ちヨキ：カンを木口に打ち込むためのもの。

牛の草鞋：岩肌の出ている場所で牛のひづめにとりつけて、爪を保護するもの。長さ43cm。



牛の草鞋



ソリ



カン打ちヨキ カン

弥生人のマツリと暮らし —九州から見た瀬戸内—

愛媛大学教授 下條信行

最近出ている歴史の読み物や歴史の体系などを見ても、弥生時代の場合では九州と畿内、つまり銅矛と銅鐸の文化圏のことはよく書いてあるが、なぜか瀬戸内の文化圏は取り上げられていません。それで今日は、瀬戸内もりっぱな自前の文化圏を持っていたことをお話ししたいと思います。

九州が日本史の中で最も活躍したのはやはり弥生時代で、それは農耕というものを日本の中でのいちはやすくキャッチして育てたことによります。ということで、唐津市の菜畑遺跡を取り上げ、稻作の始まりが大陸とどういう関係があるのか、また北部九州の稻作が自前の農耕文化をどう表現していくかを先ず話してみたいと思います。

日本は野生の米（稻）・ムギ・アワ・ヒエなどは無く、野生のものを育てていくわけにはいきません。ではどこから来たのかという話の前に中国大陸の農耕について少しお話しましょう。中国大陆の農業は、淮河の北側と南側で大きく違っています。淮河は北の黄河と南の揚子江（今は長江）の真中あたりの江苏省を東流する大河ですが、この線を境に寒暖・雨量など自然条件が違い、その北側は落葉樹林帯、南側は照葉樹林帯です。淮河より北側ではアワが一番作られています。中国の北の方で最も古い農耕文化は紀元前5000年に遡り、斐李崗・磁山文化といつて黄河の近くにある文化ですが、この磁山遺跡では地下4mまで掘り下げてまるで井戸のようになった貯蔵穴の中から2mにわたってアワがぎっしり詰まって出土しました。中国の北の方の食糧の貯蔵法は、古い段階は穴を掘ってその中に貯蔵するのが昔からのやり方ですが、現在の農業関係の本にもそういう貯蔵法が30種類ものっています。ここでは、中国の北のほうでは古くからアワを作っていたことを記憶していただきたいのです。

さて、淮河より南で最古の米が出土した遺跡は浙江省杭州湾に臨む河姆渡遺跡で、穀・穀殼・稻の茎や葉等が出ています。これもやはり紀元前5000年の古さに遡ります。ところで米には長幅比つまり米の長さを幅で割った比が2以上のインド型と2以下の日本型があります。インド型は米のとれる地域でも暖かい南の地方で、河姆渡の米はインド型です。日本型は北の地方で育つわけです。およそ淮河より北では日本型にはほぼ統一され、かなり古くに黄河流域まで日本型の米が伝わっています。このよ

うに古く淮河の北では畑作系の農耕、南のほうは水稻耕作を始め、その後、南の米が北の方へ少しづつ広がっていきます。

一方、朝鮮半島では、朝鮮の古い農耕文化の基本は米ではなく、アワ・ヒエ・ムギという畑にできる栽培作物で、そのベースの上に日本型の米が朝鮮半島のおおよそ中部に伝わり、畑の栽培作物とドッキングした。これが日本に伝わってくるものだと考えるほうが良いと思われます。

では日本でいつその栽培が始まるのかという問題ですが、縄文時代の後期の初め説や、晩期の初めから始まるとする説があるが、論拠とする資料の出土状況に問題があり、また農耕に係わる道具や当時の文化が複合して伝わっていなくてはならないのだが、見つかっていません。だれもが認める日本の稻作の開始の段階というのは、唐津市菜畑遺跡の12層から9層といっている縄文時代晩期の後半からで、このとき米に雜穀類が伴って日本に伝わったようです。その時の日本側の対応状況は一体どうであったかを石器などを通して見てみましょう。

糞遺跡で縄文晩期後半期の石器のうち石斧丁・扁平片刃石斧・磨製石鎌などは朝鮮半島のものに非常に類似しています。このことは、縄文人が全く知らない石器は朝鮮の石器の型式をそのまま受け入れたことを示しています。ところが伐採石斧は縄文人も既に知っているものです。したがって太形蛤刃石斧は朝鮮半島のものをそのまま受け入れるのではなく縄文人の主体性のもとに、形態と重量の面で両者の落し子的なものを生み出しています。そして弥生時代の最も古い時期には、以前に入ってきた朝鮮半島製のもののといった石器なども日本的なものに作り替えられていきます。この様な在り方は石器だけではなく、土器でも同様な在り方を示しています。このころ既に朝鮮半島では壺・壺・鉢・高杯が一應揃っているので石器と共に全部揃って入ってきて良いわけです。しかし縄文社会には壺に相当する深鉢と浅鉢があり、そこで自分達に欠けていた壺と高杯のようなものを取り入れるわけです。以上のことから全体的に考えると、渡来者の文化のみで農耕は開始もしていないことが解ります。米を作るノウハウ、その高級技術については朝鮮半島の人々の指導によると見られます。農耕文化の受容にあたって、在地の縄文人と渡来人との実際の関係は、石鎌の出土状況からみて、それなりに友好的な関係の中で始まり、武装的衝突は無かったと見られます。そのようにして始まった農耕文化はその後、九州では縄文晩期の段階で鹿児島の奥地まで入っているが、九州外ではだいたい関西まで広がったと見て良いでしょう。それは未だ縄文の系

譜を残したままの段階で広がっています。そういう縄文的な体質から卒業していくというのは何によっていうのか。この目盛りは朝鮮に起源を持つ壺にではなく、深鉢にあります。縄文の深鉢から弥生の壺へ変わるとということは、縄文的な土器から別れ、弥生的な時代になるということです。北部九州の前期の土器は板付I式と板付II式ですがこの板付I式的土器は福岡県の北部と佐賀県の北部といった狭い範囲に分布しています。そして板付II式の段階になって新しい波となって弥生文化が東のほうへ広がっていきました。最近、東のほうでは最古の弥生土器には縄文晩期の土器がほとんど伴い、そういった板付II式の文化はいまや秋田県まで広がっていることが知られます。しかし東北地方では板付II式の土器はほとんど定着することもなく、また縄文式的な土器の中に戻っていきます。そういう意味でいうと弥生的な文化や体質は西日本の社会で形成されていくことが多いと思われます。

では次に瀬戸内地方の話に入ります。四国の松山は大陸文化をキャッチしていく瀬戸内の窓口になると思います。最近、松山では朝鮮半島南部の壺にみられる文様をもった縄文晩期の壺が出土しました。また弥生前期になると有柄式の石剣が朝鮮半島からの持ち込み品を含めて10本出ています。九州でもこれだけまとまって出土する地域は余り無く、松山では大陸からの文化のキャッチというのは早いわけです。この石剣は一つの祭器、マツリの道具とみられます。このあとに登場するのが、朝鮮半島から伝わってきた細形銅劍です。瀬戸内地方で出てくる細形銅劍の中には九州でも見られない特徴が二つあります。まず関部の上に穴を開けた点です。これは朝鮮半島で既に儀器化への道を辿っていた銅劍の意味をキャッチして、実用品から祭器へ昇華するために穴を開けたとみられるものです。つまり祭器的なとらえ方が瀬戸内地方では非常に早かったということです。そのことを示すもう一つの証拠があります。愛媛県の東の方の土居町で出土した細形銅劍2本は、鍛の付き具合から土中での埋納状態を推定すると刃部を縦にしていたもので、これは島根県荒神谷遺跡の銅劍や佐賀県見谷遺跡の中広形銅矛の埋納状態と同じです。愛媛県における先の銅劍の型式からしても、武器形の青銅器を土中に埋納するという風習は瀬戸内的一部分で早く始まっていることを示していますが、今の段階では武器をマツリの道具に変えていく祭器化が遅く始まったのは瀬戸内の西部、燧灘沿岸あたりではないかと思っています。四国の青銅製祭器のシンボルは平形銅劍ですが、細形銅劍から平形銅劍への3~4段階の変化が継続して起こったのは、愛媛の東部（東予）から香川の西あたりです。広島や岡山・徳島で

は全型式は揃いません。そして、この平形銅劍の発展のバックアップをしたのはどこかという問題では、銅鐸と平形銅劍に見られる「鉤掛け」の技術論から畿内の銅鐸作りの関与、つまり畿内を想定した説もあるが私は否定的です。大分市清水ヶ迫遺跡出土の平形銅劍の最古のもの、福岡市八田出土の非常に古い段階の平形銅劍の鉤型などからみて、平形銅劍の発達には九州的なものの背景・バックアップが有って成長したのではないかと思っています。

ではこの平形銅劍はどうなるのかという問題ですが。弥生時代の後期の前半には、青銅製の祭器は九州では中広形銅矛、瀬戸内では平形銅劍I、畿内では扁平錐式銅鐸が使われ、つぎの後期後半にはそれぞれは広形銅矛、平形銅劍II、突線錐式銅鐸へと変わっていきます。このようにおののの時間的な平行関係があるが、これを分布状況の面から見ると、後期の前半くらいには中広形銅矛も扁平錐式銅鐸も瀬戸内に入っています。とくに高松あたりに集中していて、平形銅劍Iを含めた三者は拮抗しています。それが最後の段階には、突線錐式銅鐸の高松などの中部瀬戸内から徳島に後退し、一方、九州系の銅矛も愛媛の西・宇和海の近辺まで引っ込みます。そうすると香川・愛媛の大部分・広島・岡山の青銅器文化は平形銅劍の世界になります。こういうことが明らかになると、從来いわれているような、銅鐸あるいは銅矛をもって弥生社会を統一してしまう、という話は成り立たないわけです。つまり弥生後期には大地域社会が成立したを見るほうが良いのではないかと思うわけです。それを認めた上で相互関係はどうかという問題を考えねばならないと思うのです。

(昭和63年2月6日 美術館研修室にて開催)

講師の紹介

下条 信行 (しもじょうのぶゆき)

昭和17年福岡市生まれ

九州大学大学院で考古学を専攻

九州大学考古学研究室助手

平安博物館講師

西南学院大学助教授

現在愛媛大学文学部教授

先生は日本のみならず朝鮮・中国などの東アジア地域を対象とした考古学研究者で日本考古学では九州・瀬戸内・畿内の実状に精通した数少ない研究者のひとりです。遺跡や遺物を総合化した理論的研究に秀でた業績をあげられ、大陸系磨製石器や青銅器の研究に新段階を拓いた先生です。

肥前国府政庁復元の試み

—肥前国分寺・郷長屋敷・農民の屋敷を含めて—

今回の肥前国府政庁の復元図の作成は、博物館展示において、これまで、その遺構写真と平面的图形を示すことをしか出来なかつたが、一般の理解を得やすいように、当時の肥前国府の状況を可能な限り復元を試みてみた。

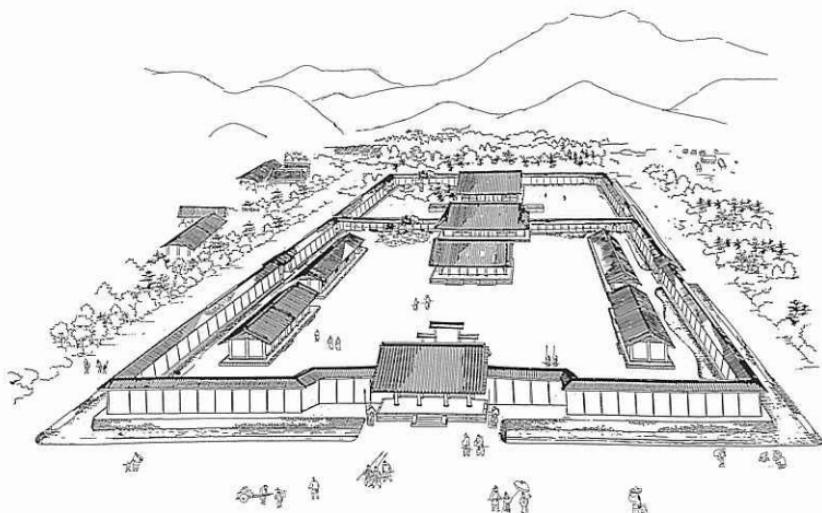
今回、復元図を作成したのは、肥前国府・肥前国分寺・神崎町志波屋四の坪遺跡・東脊振村浦田遺跡である。いずれも、奈良時代の遺跡で、当時の官庁の建物や農民の家屋や生活状況を示すものである。国府・国分寺は発掘調査で、ほぼ全体が確認されている。その下の行政機関である郡衙（衙）は、旧肥前国域では、全容があきらかなものはないので、復元は試みなかつた。神崎町三の坪遺跡は、行政の末端である郷（里）の郷長の屋敷を考えた。東脊振村浦田遺跡は奈良時代の農民の屋敷跡である。

肥前国府政庁は、発掘調査成果にもとづき、主要建築物が礎石建物となったII-4期を復元した。建物は、すべて瓦葺で、正殿は、国司の執務場所で、四面に庇のつく構造で、屋根は入母屋造りである。前殿は吹き放ちで、儀式や国司への拝問の際に身分毎に整列する建物とした。後殿は回廊・目隠し屏で周囲から遮蔽を必要とした閉鎖

的城の主殿であり、壁のある建物とした。前殿・後殿の屋根は切り妻造りである。脇殿は、官吏の執務場所と考え、壁があり、間仕切りのある構造とした。屋根は切り妻造りである。南門は八脚門で、屋根は切り妻造りである。東西の築地は、一旦内側へ折れて、南門にとりしている。このような例は、敷地に制約のある奈良市興福寺の南大門にしか類例がない。肥前国府には充分な敷地的余裕はあるのに、こうした構造をもつた不可解である。都振りのデザインとして、この構造をとつたとするなら面白い。正殿・後殿附近には、園地を配してみた。政庁外には、西方に附属の役所、西北方には惣座遺跡で検出した正倉（正税である稻を納める倉）がある。東後方には、久池井遺跡が建物群を国司の館とみたてた。

肥前国府政庁と附属の官衙、その他、側溝をもつ道路とみられる遺構との間に、規格的な計画的配置関係は、これまでの調査では、認められていない。国府域については、方8町とか方6町とか、大路・小路が縱横に走る整然とした都市が考えられているが、肥前国府では、政庁を中心に、その周辺に点々と附属の官衙がアトランダムに配置されているにすぎない。周防国府を除き、当時の地方都市は、案外こういうものかも知れない。

肥前国分寺跡は佐賀郡大和町真島にある。現在、建物は小堂宇を残すのみである。昭和49～50年にかけて大和



肥前国府（政府）復元図

町教育委員会によって調査され、寺域および伽藍の配置が明らかになっている。寺域は、方2町約216メートル四方で、その中方から少し西よりのところに主要伽藍がある。講堂・金堂が南北に並び、金堂の東南方に塔を配置する。金堂の南側約60メートルのところに中門跡がある。回廊が、講堂・金堂・塔をとりこむ形式である。

講堂は整地土や原位置を動いた礎石が散在するのみで明確な構造はないので、他例に倣って復元した。金堂は基壇と原位置の礎石や礎石根石がある。桁行9間、梁間4間の建物で、桁行の長く、特殊である。基壇を厚く、しっかり造っているので重層の建物として復元した。塔は、掘込み基壇で、地上に土壘状に一部を残すが、一边が約25メートルの巨大なものである。全国国分寺の塔の基壇地形としては最大である。これからすると、肥前国分寺の七重塔は、奈良東大寺の七重塔が約100メートルといわれているので、それに次ぐ、約80メートル以上の塔が考えられる。いかがなものであろうか。

神埼町志波屋三の坪の建物群の復元。肥前国を東西に横断する奈良時代の官道跡が、この遺跡の南約100メートルの所で検出されている。駅家と考えられる建物群も官道跡に近接して検出され、三の坪遺跡は、あるいは駅司の筋跡であるかも知れない。三の坪遺跡の東後方には、多くの掘立柱の倉庫を中心とした建物群が、各所にグループをつくりながら200棟近く検出されている。農民層の集落と考えられるところから、三の坪遺跡を地域的に統括する郷（里）長の館跡とみたい。いずれも掘立柱の建物で、7棟あり、西方に口を開いて、コ字状に配置されている。

中央に5間×2間の主屋があり、それを囲むようにして、3間×2間の建物がある。西南隅の建物は総柱で、倉庫と考えられる。屋根は切り妻造りで、板葺きとした。主屋の全面は広場となっている。

東脊振村浦田遺跡は、大部分が堅穴住居で、一部に掘立柱の建物が存在する。小集落が形成され、カマドと煙出しをもつ堅穴住居と総柱の掘立柱の倉庫、3間×2間の掘立柱の建物で構成されている。複数の世帯で構成される奈良時代の農民の屋敷として復元を行った。

肥前国府政府は、国立歴史民俗博物館で、復元図を作成した下野国府政府を参考に復元図を作成した。肥前国分寺は、国立歴史民俗博物館で作製された陸奥国分寺の模型の写真を参考に作成した。神埼町三の坪遺跡の郷長の屋敷については、佐賀県文化課の現地説明会資料を参考にしている。

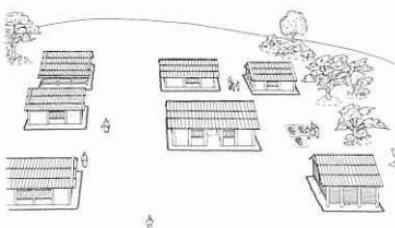
参考文献

「肥前国府跡」I～III 佐賀県教育委員会 1978・
1981・1985

「肥前国分寺跡」 佐賀県大和町教育委員会 1976
「神崎工業団地内文化財発掘調査 昭和61年度調査の
概要」 1987
「浦田遺跡」「西田遺跡」 佐賀県教育委員会 1983



肥前国分寺復元図



神埼町志波屋三の坪の家屋復元図



東脊振村浦田の家屋復元

行事のお知らせ（昭和63年度）

常設展（第1期）

展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県の歴史と文化	4月1日～4月21日	大人 200(150) 大・高生 150(100) 中・小生 70(50)	博物館
昭和62年度新収蔵品展	4月1日～4月21日		博物館
近代の美術・工芸（第2期）	6月29日～9月25日		美術館

*美術館の第1期常設展は、第2回佐賀県現代作家美術展開催のためお休みします。

企画展

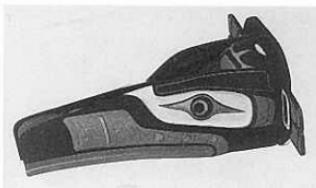
展覧会名	会期	会場	内容
第2回佐賀県現代作家美術展	4月2日～4月17日	美術館	日本画・洋画・彫刻・工芸・書約150点
日展	4月28日～5月22日	博物館 美術館	日本画・洋画・彫刻・工芸・書約450点
第35回子どもの書道展	6月1日～6月5日	美術館	県内幼・小・中学生の書3,000点
第13回九州藍笛会かな書作展	6月7日～6月12日	美術館	かな書作品約100点
第71回佐賀美術協会展	6月18日～6月26日	美術館	日本画・洋画・彫刻・工芸約450点
第13回佐賀県書作家協会展	7月5日～7月10日	美術館	会員・一般公募の書作品約180点
第5回佐賀県写真協会展	7月13日～7月17日	美術館	協会員のパネル写真約200点

—昭和63年度博物館・美術館特別企画展のご案内—

博物館 神々のかたち — 仮面と神像展

会期 昭和64年2月21日(火)～3月21日(火)

世界各国の仮面と神像を約200点展示します。民族学的な見地を生かしながら仮面と神像の優れた造形美に焦点をあて、世界各国の文化の特徴を広く紹介するものです。



仮面オオガラス（カナダ） 国立民族学博物館蔵

美術館 美術館開館5周年記念 — 田園風俗画展

会期 昭和63年9月30日(金)～10月23日(日)

佐賀県立美術館開館5周年を記念して開催するもので、江戸時代を中心とした田園生活に取材した風俗画の優品を屏風を中心に約60点展示します。



長谷川雪旦筆「農耕図屏風」(部分) 佐賀県立博物館蔵

博物館・美術館報 第80号

発行年月日 昭和63年3月15日

編集 大塚正道

発行 佐賀市城内1丁目15番23号

佐賀県立博物館

佐賀県立美術館